

## コガネグモ相撲における横棒土俵の扱い方に関する一考察

An analysis on the ways of using slender sticks on spider fighting

関根 幹夫

Mikio SEKINE

In this paper, I will discuss ways of using the slender sticks used for spider fighting with ‘Kogane’ spiders, or *Argiope amoena*, in terms of ethnoentomology. There is a slight variation among the usage of slender sticks in these games which volunteers put on. At Kajiki in Kagoshima Prefecture, the spider fighting contest was established in 1925. In those days, they might have enjoyed the games using slender sticks planted in the ground. In the Kajiki’s present style, the slender stick on which spiders are put is fixed onto a vertical post, in a horizontal position. This style had already come into being by about 1946. At Nakamura in Kochi Prefecture, the slender stick used to be held by the referee’s hand. Then, the usage of the stick had varied until it was fixed onto the vertical post. The spider fighting contest in Kainan City in Wakayama Prefecture and Kumamoto City are both modeled after that used in Kajiki. On the other hand, at Kashinourago in Nagasaki Prefecture, the slender stick is held by the referee’s hand on a nearly horizontal plane. Let me point out another possibility that the Kashinourago’s style still remains today because it is not connected with Kajiki. The referee’s hands are free in the Kajiki’s style, so the referee can judge the matches without any errors, do it lightning-fast, and protect spiders against injury or even death. Another point is that this style produces many detailed rules of the games. The facts above suggest that each of the spider fighting games has been refined even after volunteers first established the tradition.

### 要約

本稿では、コガネグモを用いたクモ相撲における横棒土俵の扱い方の工夫が、この伝承遊びが行事化された以後もなされてきたことについて、民族昆虫学の観点から考察する。現在のコガネグモ相撲は、横棒の扱い方に違いがみられる。鹿児島県始良市加治木町では、1925年の行事化に前後し、地面に突き立てた棒上でクモを闘わせていたと推察されるが、1946年頃には、横棒土俵をたて棒支柱に取り付けて行う方法が採用されていた。高知県四万十市中村では、行司が

横棒土俵を手で持つ方法から、横棒をたて棒支柱に取り付けて行う方法に変化した。熊本市と和歌山県海南市のコガネグモ相撲は、加治木町の「くも合戦」の技法が交流により伝播したものである。一方、長崎県西海市大瀬戸町檜浦郷では現在、行司が横棒土俵を手で持つ方法で行われている。加治木町との交流がなかったことから、この地にこの方法が残っている可能性を指摘しておく。たて棒支柱に横棒土俵を取り付けることで、行司は両手を使うことが可能となった。この方法は、的確な勝敗の判定とクモを死なせない行司さばきをもたらす、細部にわたる勝敗のルールを生み出した可能性がある。

### はじめに

クモを闘わせる子どもたちの遊びは、かつて日本できわめて広く行われていた(川名・斎藤 1985)。この遊びは殆どの土地で消え去ったが、クモを闘わせる遊びのうちの2匹のコガネグモを横棒の土俵上で闘わせるコガネグモ相撲は、現在おとなたちによって組織化・行事化され、保存継承されている。コガネグモ相撲は現在、鹿児島県始良市加治木町、高知県四万十市中村、長崎県西海市大瀬戸町檜浦郷、熊本市(斎藤 2004)と、和歌山県海南市で毎年行われている(ビオトープ孟子 2008)。野中は、ヒトと昆虫との関わりの研究を、「応用昆虫学」、「文化昆虫学」、「民族昆虫学」の3つの枠組みに体系化した(野中 2005)。本稿は、民族昆虫学の観点から、行事化された日本各地のコガネグモ相撲を比較し、この習俗におけるクモと人々の関わり方という「関係化」のなかにある自然に対する人間の創造性の一端を明らかにするものである。

クモ相撲についての先行研究を概観すると、コガネグモ相撲における横棒土俵の扱い方に関しては十分な資料は示されていない。斎藤は、南西諸島でのオオジョロウグモやチブサトゲグモを闘わせる遊び、九州・四国・本州で広く行われていたコガネグモ相撲、東日本のナガコガネグモ相撲、房総・横浜や紀伊半島南部でのハエトリグモ相撲、ジグモやカバキコマチグモの遊び(三浦半島)について詳細な報告を行った。クモ相撲の習俗が、西日本から伝播し東日本で多様化した可能性を指摘した。また、クモの言い伝えの蒐集、日本各地と韓国でのクモの呼称の調査、民俗学的観点から人々のクモ観について報告をした。斎藤は、造網性のクモを闘わせる遊びは、1) 他のクモの網にクモを投げ入れて闘わせる、2) 地面で闘わせる、3) 地面にたてた垂直な棒上で闘わせる、4) 横棒上で闘わせる、という方法で行われていた、と報告している(斎藤 2002)。またクモ相撲で、コガネグモが好んで用いられたことに関する研究もある(吉

田 2004). しかし, コガネグモ相撲が, たて棒支柱に横棒の一端を取り付けて行うように変化したことに関しては, 採り上げられてこなかった. 筆者は, 先にフィリピンのクモ相撲と横棒使用の日本のクモ相撲の比較から, クモ相撲における横棒土俵の扱い方の工夫がこの遊びの質を高めた可能性と, 行司(審判)が横棒を手で持つ方式は, 横棒使用のクモ相撲の原型である可能性に関して, 予備的考察を報告した(関根 2010).

現在日本の各地で行われている行事化されたコガネグモ相撲には, 多くの共通点がみられるが, 横棒の扱い方には違いがみられる. 人々は, 子どもの頃に遊んだコガネグモ相撲という伝承習俗を保護・継承するに留まらず, この遊びが行事化された以後も, この遊びの質を高める工夫を創造してきたのではないだろうか. また, 早くからコガネグモ相撲の組織化がなされた加治木町の「くも合戦」の方式が, 各地で模倣された可能性があるのではないだろうか. 本稿では, このことを明らかにするため, 現在のコガネグモ相撲における各地での闘いの方法・横棒土俵の扱い方, 勝ち負けのルールを調べる.

## 方 法

2002年から2009年の6月の第3日曜日に, 鹿児島県始良市加治木町の加治木町福祉センターで開催された「くも合戦」を取材した. 2005年8月7日, 高知県四万十市中村の一条神社境内で開催された「全日本女郎ぐも相撲大会」を取材し, 一条神社の川村公彦 宮司から聞き取りをした. 女郎ぐもとは, コガネグモの中村方言である. 2009年7月19日, 熊本市の中無田閘門プレイパークで行われた「熊本くも合戦」を取材し, 熊本くも合戦実行委員会の藤本 宏さんから聞き取りをした. また2005年7月17日, 和歌山県海南市の孟子不動院那賀寺前で開催されたNPO法人自然回復を試みる会・ビオトープ孟子主催の「こがねぐも相撲大会」を取材した. さらに2007年から2010年の3年にわたり, 海南市のわんぱく公園に会場を移したこのコガネグモ相撲を取材し, 主催団体の北原敏秀 理事長から聞き取りをした. 2010年6月20日, 長崎県西海市大瀬戸町檜浦郷で, 「檜浦山こぶ選手権大会」を開催している檜浦山こぶ愛好会の宮守公治さんから聞き取りをした. 山こぶとは, コガネグモの檜浦方言である. また, 長崎新聞の「檜浦山こぶ選手権大会」のインターネット上のビデオ映像を, 2010年10月10日に参照した(長崎新聞 ながさき動画館 <http://www.nagasaki-np.co.jp/kankou/douga/34/index.html>).

## 結 果

### 1. 鹿児島・加治木町

約 1 m 30 cm のたて棒の支柱に、長さ約 60 cm の 1 本の横棒（「ひもし」と呼ばれる）の一端が固定されていた。この横棒の先端に「かまえ」と称するクモを待機させ、「しかけ」と称する対戦相手のクモを行司（主審）が仕切って向かい合わせた上で対戦させた。副審は、行司の前の一段低い床にいた。行司は、上からクモの闘いを見ているのに対し、副審は、下の方の裏側からクモの闘いを見ていた。勝ち負けの微妙な点は、行司が副審と話し合っただけで決着を着けていた（図 1）。2 匹のクモに戦闘意欲がみられない場合、行司はクモの脚に砂をかけ、闘いを促していた。勝ち負けのルールは、1) 相手のクモの後背尻（加治木町でドンという）に平たいクモの糸（捕帯）をかけたものが勝ち、2) 同じく後背尻（ドン）にかみついたものが勝ち、3) 相手のクモの糸が垂れて横棒からぶらさがったのをすかさずその糸を切り落としたものが勝ち、4) 戦闘意欲のないクモは、行司の判断により引き分けとする、というものであった。クモが死なないように配慮し、勝っても負けてもクモを自然に還していた。



図 1. 加治木町の「くも合戦」2002 年 6 月 16 日，加治木町福祉センター。

### 2. 高知・中村

水を張った木製の箱に約 60 cm のたて棒が取り付けられており、このたて棒の支柱に長さ約 50 cm の 1 本の横棒の一端が固定されていた。この横棒上で 2 匹のクモを闘わせた（図 2）。一條神社の川村公彦 宮司から、この闘わせ方は 15 年程前から考案されたものであり、横棒から落ちたクモが水をいやがり、クモが横棒土俵に登り再び闘うのを促す工夫である、また、長時間の大会の間、横棒を手で持つことで行司が疲れるのを回避するためでもある、との聞き取りをした（2005 年 8 月 7 日）。勝ち負けのルールは、1) 相手のクモに糸をかけた

ものが勝ち (この決まり手を中村で「まきこみ」という), 2) 相手のクモの腹部にかみついたものが勝ち (「がっぷり」), 3) 相手のクモが横棒から糸でぶらさがったその糸を切り落としたものが勝ち (「やぐら落し」), 4) 相手のクモが逃げてばかりのときは優勢勝ち, というものであった.



図 2. 中村の「全日本女郎ぐも相撲大会」2005 年 8 月 7 日, 四万十市中村の一條神社境内.

### 3. 熊本市

地面に棒を立て, このたて棒の支柱に長さ約 60 cm の 1 本の横棒の一端が固定されていた. この横棒の先端に「かまえ」のクモを待機させ, 「しかけ」のクモを行司が仕切って向かい合わせた上で対戦させた (図 3). 勝ち負けのルールは, 鹿児島・加治木町のルールに準じていた. 藤本 宏さんからこの行事は, 加治木町の「くも合戦」を参考に 13 年前 (1997 年) に始めた, との聞き取りをした.

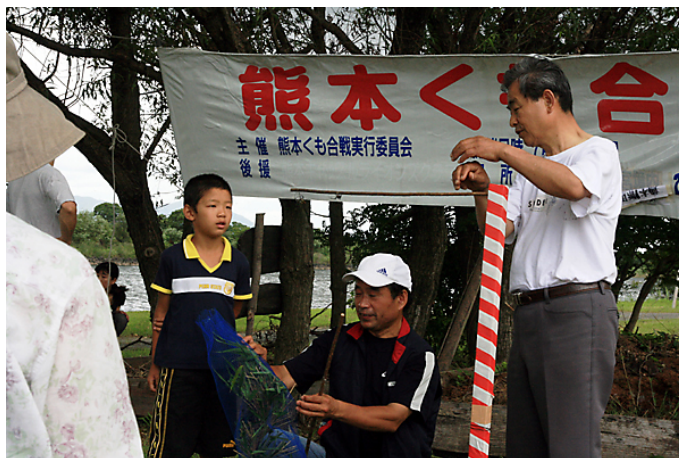


図 3. 熊本市の「熊本くも合戦」2009 年 7 月 19 日, 熊本市の中無田閘門ブレイパーク.



#### 4. 和歌山・海南市

人工芝を張った板に、たて棒が取り付けられており、このたて棒の支柱に長さ約 60 cm の 1 本の横棒の一端が固定されていた。2005 年 7 月 17 日の大会では、二匹のクモはなかなか闘わずに「引き分け」となり、参加した子どもたちのジャンケンで勝敗が決まることが多かった。また、加治木町のように「かまえ」と「しかけ」という厳密な立会いは見られなかった。

2007 年と 2008 年、主催者により子ども行司役を務める小学生が加治木町の「くも相撲」に派遣され、行司の勉強をする取り組みが行われた(図 4)。2009 年の第 10 回大会には、加治木町くも合戦保存会の三役が来賓として招かれた。以上のように、この地のクモ相撲は加治木町との活発な交流がなされている。なお、北原敏秀 理事長から、この行事は東條 清さん(海南市教育長)により 2000 年に始められた、との聞き取りをした。



図 4. 海南市の「こがねぐも相撲大会」2008 年 7 月 13 日, 海南市わんぱく公園.



図 5. 大瀬戸町樫浦郷の「樫浦山こぶ選手権大会」2002 年 6 月 23 日, 大瀬戸町樫浦公民館(宮守公治氏 撮影).

## 5. 長崎・大瀬戸町檜浦郷

宮守公治さんからの聞き取りにより、畳に座布団を置き、この上方で行司が手で横にして持つ長さ約 50 cm の棒上でクモを闘わせることを確認した(図 5). 勝ち負けのルールは、1) 相手のクモにかみついたものが勝ち、2) 相手のクモを横棒から落としたものが勝ち、3) 相手のクモが横棒から糸でぶらさがったその牽引糸を切ったものが勝ち、というものであった。宮守公治さんから、「檜浦山こぶ選手権大会」は 1982 年から行われている、2002 年加治木町で開催された「くも合戦全国大会」に前後して、加治木町くも合戦保存会の檜浦郷訪問があったが、これを除いては、加治木町との特段の交流はなかった、との聞き取りをした。この地のクモ相撲を記録した長崎新聞のビデオ映像(長崎新聞 ながさき動画館 2004 年 6 月 20 日撮影)では、行司が横棒を若干上向きにするすることで、下の方に位置していたクモが上の方に歩み始め、上方に位置するクモとの闘いを促す様子が見られた。

各地のコガネグモ相撲の調査結果を表 1 に示す。

表 1. 各地のコガネグモ相撲

調査地	かつての闘わせ方	現在の闘わせ方	加治木町との交流
1. 鹿児島・加治木町	地面に立てた垂直な棒上	たて棒支柱に固定した横棒上	—
2. 高知・中村	行司が手で持つ横棒上	たて棒支柱に固定した横棒上	不明
3. 熊本市		たて棒支柱に固定した横棒上	有
4. 和歌山・海南市		たて棒支柱に固定した横棒上	有
5. 長崎・ 大瀬戸町檜浦郷		行司が手で持つ横棒上	無

## 考 察

現在各地で行われている行事化されたコガネグモ相撲には、多くの共通点が見られるが、横棒の扱い方には違いが見られる。鹿児島・加治木町、高知・中村、熊本市と和歌山・海南市のコガネグモ相撲では、現在横棒の土俵はその一端がたて棒の支柱に取り付けられている。一方、長崎県西海市大瀬戸町檜浦郷では、行司が手で横にして持つ棒上で 2 匹のコガネグモを闘わせている。加治木町では、1925 年(大正 14 年)に「加治木蜘蛛同好会」が結成され、おとなたちによってコガネグモ相撲が行事化された。この前年のコガネグモ相撲につ

いて、棒を突き立てこれに2匹のクモを這わせて行ったとの記事が、『鹿児島新聞』1924年(大正13年)6月7日付に掲載されている。加治木町では、終戦後1946年5月に「くも合戦大会」が復活した(加治木町教育委員会 1999)。この頃撮影されたと思われる写真では、横棒の一端がたて棒の支柱に取り付けられている。加治木町では、1925年の行事化に前後し、地面に突き立てた棒上でクモを闘わせていたと推察されるが、1946年頃には、横棒の一端をたて棒の支柱に取り付ける方法が採用されていた。加治木町では、横棒土俵の一端をたて棒の支柱に取り付けて行う方法が早くから考案されていたと思われる。また、高知・中村では、1950年(昭和25年)にコガネグモ相撲が行事化され第1回大会がおこなわれた。高知・中村のコガネグモ相撲については、行司が手で横にして持つ棒上でかつて行われていた写真がある(池田 1989)。高知・中村では、行司が手で持った横棒上でクモを闘わせる方法から、横棒土俵の一端をたて棒の支柱に取り付けて行う方法への変化があったことになる。

次に、加治木町の横棒土俵の扱い方が、各地へ伝播した可能性について考察する。藤本 宏さんから熊本のコガネグモ相撲は、加治木町の「くも合戦」を参考にした、との聞き取りをした。また、和歌山・海南市のコガネグモ相撲を始めた東條 清さんはクモの研究者であり、加治木町の「くも合戦」を訪れていた(東條 2001)。和歌山・海南市についても、加治木町の「くも合戦」を参考にして始めた可能性がある。この地のコガネグモ相撲は、加治木町との積極的な交流がみられ、現在加治木町の技法が採用されている。以上のことから、加治木町の横棒土俵の扱い方が、熊本市と和歌山・海南市に伝播したことが指摘できる。なお、高知・中村のコガネグモ相撲と加治木町のコガネグモ相撲の関連については現段階ではよくわからない。一方、長崎・大瀬戸町檜浦郷では現在、行司が手で持った横棒上でコガネグモ相撲が行われている。宮守公治さんからこの地のコガネグモ相撲は加治木町の「くも合戦」と特段の交流はなかった、との聞き取りをした。大瀬戸町檜浦郷では加治木町との交流がなかったことから、行司が手で持った横棒上でクモを闘わせるという方法が、現在この地に残っているという可能性を指摘しておく。

各地で行われている現在のコガネグモ相撲における横棒土俵の扱い方の比較により、この伝承遊びが行事化された以後も人々はこの遊びに工夫を重ね、遊びとしての質を高めてきた可能性が示唆される。加治木町では、たて棒の支柱に取り付けられている横棒の高さは、行司の目の高さに合わせてあり(加治木町教育委員会 1999)、熟練された行司の鋭い目が、瞬時の勝敗を判定する。また、クモが死なないように配慮されている。クモが相手のクモに糸をかける、あるいはクモが相手のクモにかみついた瞬間に、行司はクモに息を吹きかけ 2



匹のクモを分かち離す。行司が横棒の土俵を持っていては、この素早い行司さばきはできない。たて棒の支柱に横棒土俵を取り付ける工夫により、行司は両手を使うことが可能となった。この工夫は、瞬時的的確な勝敗の判定とクモを死なせない行司さばきをもたらし、クモの行動のより細部にまで勝敗のルールを設定するように、コガネグモ相撲の遊びとしての質を高めてきたと考えられる。また、たて棒の支柱に横棒土俵を取り付ける工夫は、クモ相撲の行事化による参加者数の増加と、それに伴う試合の長時間化から生じる、長時間にわたって横棒土俵を持つ行司の辛さを軽減するという意味があった。行司が横棒土俵を手で持つ方式でのクモの闘いを促す方法は、大瀬戸町檜浦郷にみられるように、クモが上方に向かって歩くという習性に基づき、横棒土俵を傾けることであった。これは、クモの闘いを促す最も自然な方法と考えられる。このことから、行司が横棒土俵を手で持つ方式は、クモ相撲の原型の一つと考えられるだろう。一方、横棒をたて棒支柱に取り付けた加治木町では、クモの脚に砂をかけることでクモの闘いを促している。これは、クモの闘いを促す新たな工夫の創造と考えられる。このことは、人々がこの伝承遊びに工夫を凝らしてきたことを示唆する事例の一つといえる。人々は、子どもの頃に遊んだコガネグモ相撲という伝承習俗を保護・継承するに留まらず、この遊びが行事化された以後も、この遊びの質を高める工夫を創造してきたと思われる。

## 謝 辞

加治木町くも合戦保存会の西村正和さん、高知県四万十市中村の一條神社の川村公彦 宮司、熊本くも合戦実行委員会の藤本 宏さん、NPO 法人 自然回復を試みる会・ビオトープ孟子の北原敏秀 理事長と檜浦山こぶ愛好会の宮守公治さんには、コガネグモ相撲の情報を頂いた。ここに記し感謝申し上げます。

## 引用文献

- 池田博明 1989. クモ合戦. pp. 195-202. In:梅谷献二・加藤輝代子(編)クモのはなしⅡ. 技報堂出版(東京), 239 pp.
- 加治木町教育委員会 1999. 加治木のくも合戦の習俗. 加治木町教育委員会(鹿児島), 160 pp.
- 川名 興・斎藤慎一郎 1985. クモの合戦 虫の民俗誌. 未来社(東京), 238 pp.

- 斎藤慎一郎 2002. 蜘蛛 ものと人間の文化史. 法政大学出版局 (東京), 312 pp.
- 斎藤慎一郎 2004. クモの喧嘩遊びをめぐる民俗文化論. pp. 337-354. In: 上田哲行 (編) トンボと自然観. 京都大学学術出版会 (京都), 504 pp.
- 自然回復を試みる会・ビオトープ孟子 2008. 北野上・山東地誌 消え行く農村文化の次世代への伝承のために. 自然回復を試みる会・ビオトープ孟子 (和歌山), 325 pp.
- 関根幹夫 2010. フィリピンのクモ相撲の現況. *Acta Arachnol.*, 59: 104-108.
- 東條 清 2001. 和歌山のクモ. 著者自刊, 242 pp.
- 野中健一 2005. 民族昆虫学 昆虫食の自然誌. 東京大学出版会 (東京), 202 pp.
- 吉田 真 2004. クモ合戦の生態学—コガネグモはなぜクモ合戦に使われてきたか? pp. 355-376. In: 上田哲行 (編) トンボと自然観. 京都大学学術出版会 (京都), 504 pp.



アシナガカニグモ

兵庫県宝塚市武田尾 2004年9月26日  
関西クモ研究会採集会 撮影：加村隆英